

病棟看護師の手指衛生に関する実態調査

キーワード：手指衛生・感染管理・手指衛生のタイミング・手洗い

B棟5階 ○三浦好美・廣瀬まどか

I. はじめに

医療現場において感染対策は重要な役割を担っている。しかし現場では日々の業務や処置が多く連続的に処置を行いがちになっているため感染対策に対する手指衛生が疎かになっているのではないかと感じた。洪ら¹⁾は「手指衛生が感染管理の基であるという理解は現場において浸透しつつある」と述べているように感染管理において手指衛生は重要である。WHOの手指衛生ガイドライン²⁾においても手指衛生の5つのタイミングが提示されており、「5つのタイミングで手指衛生を実施することによって、医療関連感染を低減できる」とある。そこで今回、病棟内で手指衛生が本当に必要な場面において行われているのか、また実際適切に実施されているのかと疑問に感じ、手指衛生に焦点を当て現状の調査を行ったことを報告する。

<用語の定義>

手指衛生：感染予防策としての手洗い

II. 方法

1. 対象：病棟看護師 35 名。
2. 実施期間：2012 年 11 月 5 日～11 月 30 日
3. 実施方法：看護研究参加についての協力を口頭・紙面にて説明し、同意書を回収した。同意後、「指間を洗っている」「指先や指と爪の間を洗って

いる」「洗い残しのないように 15 秒以上かけて洗っている」など 14 項目についての手技のアンケート調査・業務中手指衛生を行った時点でチェックをしてもらう場面別タイムスケジュール表の記入・院内の手洗いマニュアルを参考に独自で作成したチェックリストを使用して研究者による手洗い方法の確認・同時にグリッターバグ® (Brevis 社製) による洗い残しの調査を実施した。

III. 倫理的配慮

研究対象者には口頭・書面にて研究の主旨・目的・方法を説明した。研究への参加・協力は自由意志によって行われること、拒否しても不利益の無いことを保証した。プライバシーを厳守し、本研究以外には使用しないことを説明した。

IV. 結果

同意書の回収人数は 30 名 (86%) であった。手技のアンケート調査では親指の付け根・指先や爪・手首が洗えていると感じている人は少ない傾向にあった。また、全体的に手指衛生が出来ている人が少ないことが分かった。(図 1)

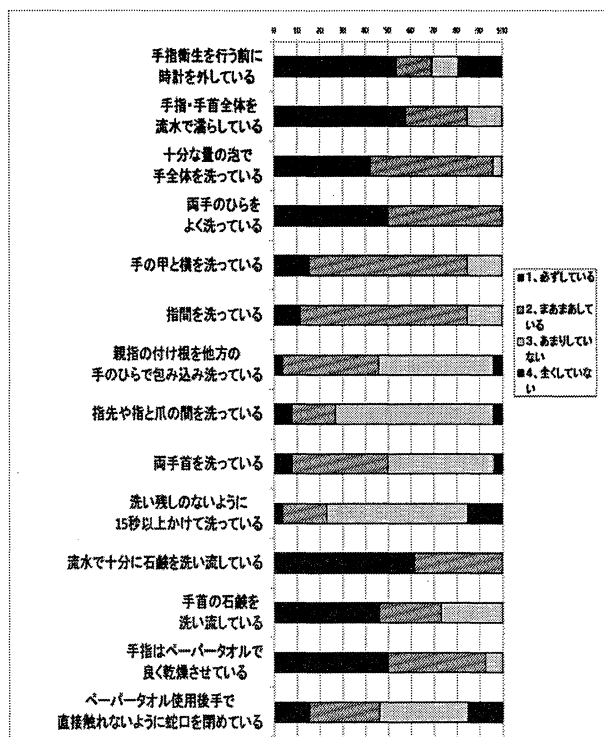


図1 手指衛生アンケートの結果

しかし、研究者による手指衛生の確認を行うと26名(87%)が院内の手洗いマニュアルに沿った方法で行うことが出来ていた。(図2)

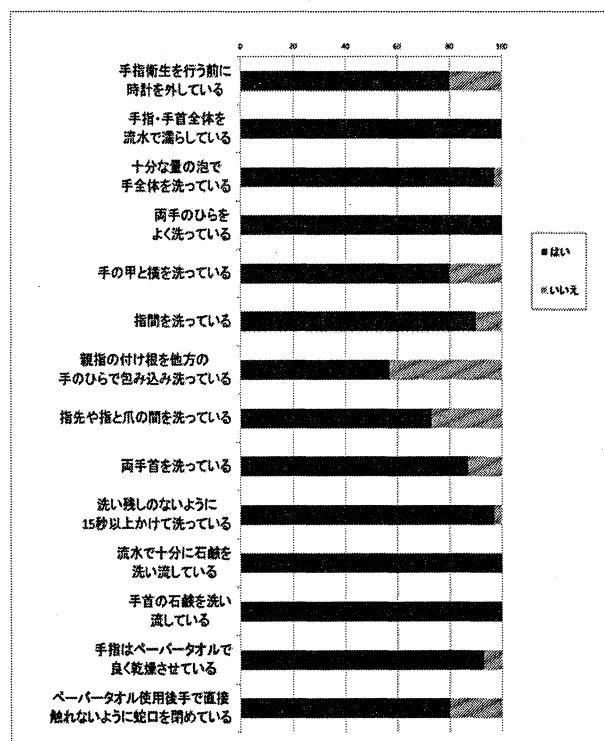


図2 チェックリストの結果

グリッターバグ®での調査では一般的に洗い残しが多いとされる指間・爪などに洗い残しが多く爪では28名(93%)指間では23名(77%)に洗い残しが見られた。また、場面別タイムスケジュール表の集計結果では手指衛生の回数は日常生活援助後は多いが、点滴やバイタルサインなどの医療処置後の手指衛生は少なかった。また、全体的に日常生活援助・医療処置前での手指衛生は行えていなかった。(図3)

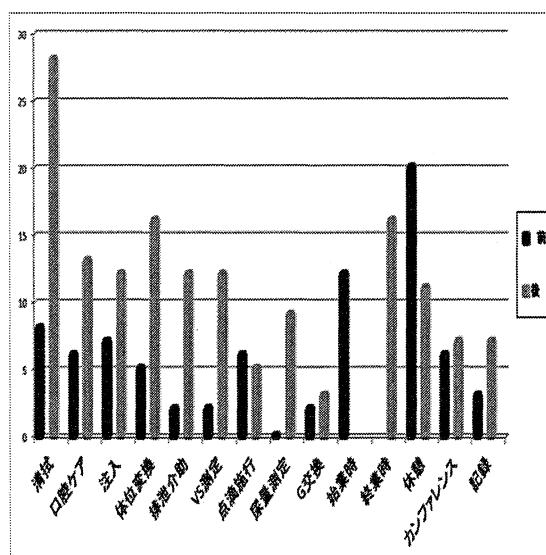


図3 場面別タイムスケジュール

V. 考察

今回の調査を5つのタイミングに当てはめると、手指衛生のタイミングが必要な時に行えていないことが分かった。その中で特に患者に触れる前が一番手指衛生の回数が少ないことが分かった。患者に触れる前の手指衛生は³⁾「手指を介して伝播する病原微生物から患者を守るため」に行わなければならないことである。しかし、多くの看護師は自分の手が感染の媒介になっているという意識は薄く、患者に関わる処置を行うこ

とで手が汚れたと思い手指衛生を行っている為、必要なタイミングで実施できていないのではないかと考えられる。

また、手技においては確認の元で手指衛生を行うと手洗いマニュアルに沿った方法で実施出来ていることから、手指衛生の手順についての知識はあることが分かった。

しかし、確認の元に手指衛生を行うと普段よりも丁寧に洗ってしまっていることが考えられる。実際では業務が忙しいことで手指衛生が疎かになっていたり、時間を短縮しがちになっていることも考えられる。丁寧に洗っていてもグリッターバグ®の結果を見ると洗い残しが見られた。この状態で業務に追われ手指衛生の手順が煩雑になるとさらに洗い残しが予想される。CDCのガイドライン⁴⁾では「手が目に見えて汚れている時、タンパク質で汚染されている時、また、血液やその他の体液で目に見えて汚れている時は手洗いをし、手が目に見えて汚れていない時はアルコールベースの手指消毒薬を用いて手指の汚染除去を行う」とある。今回は手指衛生に焦点を当てて調査を行いつたが、速乾性手指消毒剤の使用も推奨されている。業務の多忙などにより手指衛生が適切に行えず、また連続して処置を行ってしまう時には速乾性手指消毒剤との併用を促していく必要がある。

VI. 結論

- ・今回の調査で個々の手洗いの手技と手洗いのタイミングの見直しの機会となった。

- ・グリッターバグ®では洗い残しが多いとされる箇所に洗い残しが多くみられた
- ・手指衛生の手順は理解しているが実際の業務では時間を短縮しがちになっている。
- ・場面に応じて手指衛生と速乾性手指消毒剤との併用が必要。
- ・今後も手指衛生についての勉強会や啓蒙活動を継続して行っていく必要がある。

VII. おわりに

今回の調査により、病棟看護師における手指衛生の実態が明らかになった。今後は手指衛生に関する知識の向上や方法の再指導に加え一人ひとりが意識を持つことが重要である。

VIII. 引用・参考文献

- 1) 洪愛子：手指衛生パーフェクトガイド，メディカ出版，p.1，2008.
- 2) 矢野邦夫：WHO 手指衛生ガイドライン，IC News，1月号，2012.
- 3) WHO：'My5Moments for Hand Hygiene'より改変，
<http://www.who.int/gpcs/5may/background/5moment/en/>
- 4) 浦野美恵子：エビデンスに基づく感染予防対策(改訂版)，医学芸術社，p.39，2003 改変.